

J.B. Priestley の *An Inspector Calls* における登場人物間の関係と 呼称および言及に関して

笠本晃代

0. 序

本稿は、John Boynton Priestley によって書かれた *An Inspector Calls*¹ を題材とし、イギリスの当時の社会情勢を考慮に入れながら、登場人物同士の関わり方、特に彼らの間に見られる相互の呼称および言及の仕方を検証することを目的とする。

作品の背景は、1912 年となっている。この時代のイギリスには厳しい社会的・ジェンダー上の区別があり、支配階級は、現状を変える必要を全く認めていなかった。しかしながら、この戯曲が書かれた 1945 年までには、政権が変わり、これらの区別が取り払われ、Priestley は、より他人のことを思いやる社会を作るとのメッセージを送っている。

以上の時代背景を踏まえて、本作品を分析していく過程で、親族名称の使い方や個人名の使用について、呼称と言及の観点からいくらかの示唆が得られた。親族名称の使い方に関しては、複数の興味深い現象が認められた為²、別の機会に再び精査することとし、本項では、個人名の使用を中心に論を展開していきたい。

1. ラストネームの使用について

名前による呼称・言及を考慮に入れる時、本作品 *An Inspector Calls* を通じて、最も顕著なのは、ファーストネームの使用であった。当然予想されるように、夫婦間や姉弟間、恋人同士の間等の親しい間柄においてである。また、親から子に対して、この使用は著しかった。しかし、ここでは、それ以外の個人名として、ラストネームの使用を取り上げてみたい。まずは、以下の例を検討してみよう。

(1) Birling: Giving us the port, Edna? That's right. (He pushes it towards Eric.) You ought to like this port, Gerald. As a matter of fact, *Finchley* told me it's exactly the same port your father gets from him.

¹ 本文中の引用は、J. B. Priestley, *An Inspector Calls and Other Plays* (London: Penguin Books, 2000) 157-220. に拠るものとする。

² 場面に応じて、母親に対する“Mummy” および“Mother” の使用、父親に対する“Dad”、“Daddy”、“Father” の使用が挙げられる。

Gerald: Then it'll be all right. The governor prides himself on being a good judge of port.
I don't pretend to know much about it. (161-162)

上記は、作品の冒頭部分である。会話は、郊外にあるかなり大きな Birling 家の食堂で繰り広げられている。家族が食卓に着いている中で、当主の Arthur Birling が娘の婚約者である Gerald に話しかけている。Birling は、54、5 歳の成功した工場主で、恰幅がよく、近々ナイト爵位として叙勲表に載るかもしれないと自ら予測する程、ひどく尊大な男である。態度はゆったりしているが、言葉にはかなり訛りがある。また、長年、市参事会員を務め、2 年前は市長であり、今でも治安判事という要職に就く程の人物でもある。

Birling 家では、夜会服を着て Gerald を招き、特別な祝杯を挙げている。一方、Gerald は、Birling と同業の Sir George Croft の息子で、30 歳くらいの魅力的で、育ちのよい、都会なれした遊び人である。Birling は、ポートワインのデカンターを準備している小間使いの Edna に声をかけつつ、Gerald と会話を始める。Birling は、自分が Gerald に勧めているワインがどのような物であることを説明する際に、彼の父親もそれを購入している店の主の話を持ち出し、そのワインが上物であることを強調する。その時、Birling は、店主をラストネームであると思われる “Finchley” で言及する。この現象は、自分もワインに精通していることを Birling が暗に示したいが為に、店主があたかも自分の友人であるような印象を与えようとして、常識的には粗野とも取られるラストネームをあえて使用していると解釈するのが妥当であろう。これは、日本人の男性同士の間でも稀ではない。親密であるがゆえに許容され得るラストネームの使用の例と解釈できる。

それでは、以下の場面におけるラストネームの使用は、どのようなものであろうか。続けて考察してみよう。

(2) Mrs Burling: (staggered) Well, really! Alderman Meggarty! I must say, we are learning something tonight.

Sheilla: (coolly) Of course we are. But everybody knows about *the horrible old Meggarty*. A girl I know had to see him at the Town Hall one afternoon and she only escaped with a torn blouse—

Birling: (sharply, shocked) Sheila! (190)

(2) は、Birling の妻、Mrs Birling と娘の Sheila、そして Birling が会話をしている。Mrs Sybil Birling は、50 歳ぐらいの冷たい感じのする女性で、実家の社会的身分は夫よりも上である。また、Sheila は、20 歳代前半の、人生に非常に満足しているきれいな女性で、この夜はとても興奮している。市参事会員の Meggarty について、実際にはその本性をよく知らない Mrs Birling は、彼を “Alderman Meggarty” 「市参事会員の Meggarty さん」と役職名

称とラストネームを組み合わせて、正式で一般的な言及をしている一方で、Sheila は、“the horrible Meggarty” というように、ラストネームで言及している。これは、彼の普段の行いが災いして、「あのいやらしい、年寄りの Meggarty」のような意味で言及された表現である。皆が Maggarty の素性を知っており、彼は良くない意味での有名人である為に、あえてこのように言及されているのであろう。このラストネーム“Meggarty” の使用に関しては、無論、(1) の例とは異なり、友人のような親密さ、距離感は決して窺えない。そればかりか、冷たく突き放した印象さえも感じられる。

また、以下の用例はどうか、検討してみよう。

(3) Birling: (unhappily) Look, Inspector—I’d give thousand—yes, thousands—

Inspector: You’re offering the money at the wrong time, Mr Birling. (He makes a move as if concluding the session, possibly shutting up notebook, etc. Then surveys them sardonically.) No, I don’t think any of you will forget. Nor *that young man, Croft*, though he at least had some affection for her and made her happy for a time...

(207)

(3) は、Birling と Goole と名乗るブルムリー警察の警部なる人物が会話をしている場面である。警部は、50 歳代で、堂々として手堅く、断固とした印象の男である。彼は、当時の地味な黒いスーツを身にまとい、その話し振りは慎重で、重々しい。2 年前に Birling の工場で働いていた女性が自殺した件で、この家に聞き込みに訪れている彼は、少なからず祝宴を囲む全員にこの女性が自殺した原因があると語る。そして警部は、この場にはいないが、しばらくの間、この女性に愛情を持ち、生活の手助けをしていた Gerald もまた同様であると考えている。その際、冷静に “that young man, Croft”、つまり、「あの Croft という青年」程度の意味で Gerald に言及している。

更に、以下のような、電話における会話の場面を概観してみよう。

(4) Birling: (beginning to move) I’m going to make certain of this.

Mrs Birling: What are you going to do?

Birling: Ring up the Chief Constable—*Colonel Roberts*.

Mrs Birling: Careful what you say, dear.

Birling: (now at telephone) Of course. (at telephone) Brumbley eight seven five two. (to others as he waits) I was going to do this anyhow. I’ve had my suspicions all along. (at telephone) *Colonel Roberts*, please. Mr Arthur Birling

here. . . . Oh, *Roberts*—*Birling* here. Sorry to ring you up so late, but can you tell me if an Inspector Goole has joined your staff lately. . . . Goole. G-O-O-L-E. . . a new man. . . tall, clean-shaven. (212)

これは、警部が *Birling* 邸を出て、数分が経過した場面である。知り合いのブラムリー警察署の巡査部長に確認した結果、*Goole* という名の警部は存在しなかったという *Gerald* の驚くべき発言を受けて、*Birling* が署長である *Roberts* 大佐に電話をする。注目すべきは、*Birling* が夫人に *Roberts* 大佐のことを説明する時、そして、電話を取り次ぐ相手に対して *Roberts* 大佐に言及する時には、それぞれ “Colonel Roberts” を使用しているが、直接話しかける際には、大佐をラストネームで呼称する。そして、その後、それに呼応する形で *Birling* は、自らをもラストネームで言及している。これらは、呼称と言及の用法の違いはあるが、心理的距離の近さによって発せられるラストネームの事例であると言える。

2. フルネームの使用について

ここからは、前項のラストネームの使用と同様に希少である、フルネームによる呼称・言及された事例を検討していく。まず、以下の例を見てみよう。

(5) *Sheila*: How did you come to know this girl—*Eva Smith*?

Gerald: I didn't.

Sheila: *Daisy Renton* then—it's the same thing.

Gerald: Why should I have known her?

Sheila: Oh don't be stupid. We haven't much time. You gave yourself away as soon as he mentioned her other name.

Gerald: All right. I knew her. Let's leave it at that.

Sheila: We can't leave it at that.

Gerald: (approaching her) Now listen, darling—

Sheila: No, that's no use. You not only knew her but you knew her very well. Otherwise, you wouldn't look so guilty about it. When did you first get to know her? (He does not reply.) Was it after she left *Milwards*? When she changed her name, as he said, and began to lead a different sort of life? (182)

(5) は、婚約者同士の会話である。*Sheila* は、警部なる人物の言葉から、*Birling* 社の従業員であった *Eva Smith* が同社を追われ、*Daisy Renton* と名前を変えて生活していたこと、そして、様々な苦難の末に自殺に至った事実を知ることとなる。そこで、*Sheila* は、どの

ようにしてこの女性と知り合ったのか Gerald に詰問する。彼女は、初めに、“Eva Smith” の名前を口にするが、Gerald から満足のいく答えを引き出せず、次に“Daisy Renton” の名に言い換えて質問を続ける。ここで、Sheila の立場で考えると、相手が自分以外の女性であり、また、両方とも初めて聞く名前であるので、親しみが湧かないのは自然であろう。すなわち、正体がかめめない人物に対してフルネームを用いることで、Sheila は、非常に距離感のある第三者的な言及を行っているとして解釈される。

引き続き、以下の例を考察してみる。

(6) Inspector: (to Gerald) Go on.

Gerald: She looked young and fresh and charming and altogether out of place down there. And obviously she wasn't enjoying herself. *Old Joe Meggarty*, half-drunk and goggle-eyed, had wedged her into a corner with that obscene fat carcass of his —

Mrs Birling: (cutting in) There's no need to be disgusting. And surely you don't mean Alderman Meggarty?

Gerald: Of course I do. He's a notorious womanizer as well as being one of the worst sots and rogues in Brumley—

Inspector: Quite right. (189-190)

上記の場面では、警部に扮する男が依然として Birling 邸で聞き込みを続けている場面である。警部は、Daisy Renton として生きていた女性にどこで初めて会ったのか Gerald に質問する。Gerald は、観念し、それに応えて一部始終を語る。彼は、ブルムリーのミュージック・ホールにあるスタンドバーで働いていた Daisy Renton が楽しくなさそうにしていた様子を語る際に、市参事会員である Joe Meggarty の話題を持ち出す。その際、Gerald は、不快感を示しながら、自身が知り得る限りの Joe Meggarty の情報を提供する。ここで、Gerald が用いるのが、“Old Joe Meggarty” 「Joe Meggarty の老いぼれ」という言及である。これは、次に続く、Mrs Birling の発話に見られる、一般的な “Alderman Meggarty” 「あの市参事会員の Meggarty さん」と比較すると、より個人を強調した、鋭い Gerald の表現になっている。

次の例も分析してみよう。

(7) Gerald: (steadily) I discovered, not that night but two nights later, when we met again—not accidentally this time of course—that in fact she hadn't a penny and was going to be turned out of the miserable back room she had. It happened

that a friend of mine, *Charlie Brunswick*, had gone off to Canada for six months and had let me have the key of a nice little set of rooms he had—in Morgan Terrace—and had asked me to keep an eye on them for him and use them if I wanted to. So I insisted on Daisy moving into those rooms and I made her take some money to keep her going there. (191)

(7) は、Gerald が警部に対して、Daisy Renton を自分の友人が所有する部屋に住まわせることになった経緯を事細かに説明している場面である。自身の発話の中はもとより、作中でも初めて登場する、友人の *Charlie Brunswick* について言及する。Gerald は、彼女がほぼ無一文で、みすぼらしい部屋からも追い出されそうになっていることを可哀想に思い、国外に出かけて留守の間、部屋の使用許可を得ていた友人の存在について明らかにする。Gerald は、自身の発話の中はもとより、作中においても初めて登場する、友人の *Charlie Brunswick* についてフルネームで言及している。従って、これは、親しい間柄にある友人、すなわち、心理的に近い人物を第三者に紹介し、説明しようとする時、フルネームの使用が許容されている特殊な例と言える。

(8) Inspector: It was because she was going to have a child that she went for assistance to your mother's committee.
 Birling: Look here, this wasn't *Gerald Croft*—
 Inspector: (cutting in, sharply) No, no. Nothing to do with him.
 Sheila: Thank goodness for that! Though I don't know why I should care now.
 Inspector: (to Mrs Birling) And you've nothing further to tell me, eh?
 Mrs Birling: I'll tell you what I told her. Go and look for the father of the child. It's his responsibility. (198)

上記は、Gerald が気分転換に外出し、Birling 一家と同席していない場面で交わされている会話である。警部である人物が、Daisy Renton に子どもが生まれる予定であったことを Sheila に告げると、すかさず Birling が口を挟み、まさか子の父親が Gerald であると言おうとしているのではないかと慌てる。Birling は、この時、目の前にいない Gerald に“*Gerald Croft*” とフルネームで言及する。これにより、Gerald に対して若干の距離感が与えられると解される。

引き続き、次のフルネームの使用を観察してみよう。

(9) Inspector: But just remember this. *One Eva Smith* has gone —but there are *millions and millions and millions of Eva Smiths and John Smiths* still left with us,

with their lives, their hopes and fears, their suffering, and chance of happiness, all intertwined with our lives, with what we think and say and do. We don't live alone. We are members of one body. We are responsible for each other. And I tell you that the time will soon come when, if men will not learn that lesson, then they will be taught it in fire and blood and anguish. Good night.
(207)

(9) は、警部なる人物が、聞き込みを終えて帰る直前に、Birling 一家に対して言い残す台詞である。彼は、Eva Smith という一人の女性がこの世を去ったが、現実には、他にも同じような人がたくさん存在し、彼らと共存していくべきであると説く。その中で、彼は、“One Eva Smith”、“millions and millions and millions of Eva Smiths and John Smiths” という表現を用いる。これらは、それぞれ、「一人の Eva Smith」「何千万、何百万という無数の Eva Smith や John Smith」のように解釈され得る。つまり、仮定の例えの中で、フルネームの個人名を広く代名詞的な役割として言及に用いているのである。とりわけ、“John Smith” という固有名詞に関しては、英語圏においては、“John”、“Smith” 共にありふれた名前である為、日本語の「山田太郎」のように一般的な人名として認識されている。

最後に、以下のフルネームの使用を考察しておきたい。

(10) Inspector: ...Well, *Eva Smith's* gone. You can't do her any more harm. And you can't do her any good now, either. You can't even say 'I'm sorry, *Eva Smith.*'
Sheila: (who is crying quietly) That's the worst of it. (207)

これは、(9) の直前の場面である。ここでも警部に扮した人物は、Eva Smith はもういないということを強調している。この時、彼は、“Eva Smith” を最初に言及として用い、次に直接的な呼称として用いる。無論、特筆すべきは、実在しない人物に対する後者の事象である。この現象では、警部が Sheila を含め、少なからず Eva Smith の自殺の遠因となった Birling 一家の目線に立ち、場面を仮定して台詞を発している。実際には、目の前にいる女性に謝ろうとする時には、相手にフルネームで呼びかけることは考えにくいだが、この直接的な呼称の中で、あえてフルネームを使用することにより、Eva Smith の存在そのものを際立たせているものと考えられる。

3. むすび

本稿では、時代背景を考慮に入れつつ、登場人物の人間関係と個人名の使用に焦点を当て、呼称および言及の観点から *An Inspector Calls* を概観してきた。個人名の使用の中でも、特に、議論の対象として興味深い、ラストネームによるものとフルネームによるものに焦点を絞った。

前者に関しては、男性間で、相手が目の前にいない場面で、相手を呼称および言及、更に、自分自身に言及する場合にもラストネームの使用が認められる。これは、日本人男性の間でもしばしば確認されるが、相手に対して比較的親しみを感じている場合に許容されることがある。一方、ラストネームは反対に、相手の男性との距離感がある時、相手に言及する方法として、男性だけでなく、若い女性によっても使用され、この場合には、相手を若干突き放したような冷静さが含意されている。

後者のフルネームを用いるものについては、目の前にいない、心理的に距離感のある男性や女性に対して、男性及び女性の両方によって言及される場面で、その用法が見受けられた。また、逆に、比較的親密な関係にある男性間で、目の前にいない相手をフルネームで言及する例も確認され、これは、非常に特異であると言える。更に、架空の男性に言及する場合に、日本人の「山田太郎」に該当するような、“John Smith” が用いられ得る。そして、若い女性に謝罪しようとする時、相手の存在そのものをより強調する為に、相手のフルネームを用いて呼称する極めて稀な事象も認められた。

参考文献

- Crystal, David. 2003. *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fasold, Ralph W. 1990. *The Sociolinguistics of Language*. Oxford: Basil Blackwell.
- 真鍋和瑞. 2009. 『ことばの散歩道』 東京：開文社.
- Priestley, J. B. 2000. *An Inspector Calls and Other Plays*. London: Penguin Books.
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (eds.) 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Thomas, Jenny. 1995. *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*. London: Longman.
- Trudgill, Peter. 1974. *Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society*. Harmondsworth: Penguin.
- Zwicky, Arnold M. 1974. “Hey Whatsyourname!” *Chicago English Society* 10, 787-801.

Human Relationships and Address Terms and Reference Terms
in *An Inspector Calls* by J.B. Priestley

Kasamoto Teruyo

Abstract:

The purpose of this paper is to make a brief mention of address and reference terms in *An Inspector Calls* a three-act drama which takes place on a single night, focusing on the prosperous upper middle-class British family.

As might be expressed, first names are used most frequently, since the drama consists mainly of conversations among intimate characters in the drama. Thus, my brief discussion here is restricted to the use of last names and full names.

As regards the last name, it can be used to address and refer to the other person and to himself when the person is relatively intimate with the other person in case the other person is not in front of him. The last name, however, can be used not only by men but by a young woman when referring to the other person in case they are not on intimate terms.

As for the use of the full name, some men and women are referred to by those who are not in front of them and there seems to be a psychological distance among them. On the other hand, there is one example in which a man who has a relatively close relationship refers to the other person who is not in front of him by his full name. This can be said to be a singular case. Interestingly enough, “John Smith”, which is similar to the use of Japanese “Taro Yamada”, may be used to refer to a fictional person.

Key words: J.B.Priestley’s *An Inspector Calls*, address terms, reference terms, last names, full names

Received March 31. 2020